

池内紀 × 川本三郎

にっぽん そぞろ歩き

第3回 時代を彩る、忘れえぬ音楽



ラジオから流れた音楽、ドラマのテーマ曲、映画音楽、そしてクラシックと、お二人の音楽にまつわる話とはとめどなく広がっていきます。朝のモーツァルト、二日酔いの朝の景気つけのテーマ曲、そして『男はつらいよ』の思いがけない挿入音楽とは……。

忘れられない映画音楽

池内 ほくは小さいころから映画に出てくる音楽が好きで、レコードもCDもたくさん持っています。音があれば、映画を再現できるんです。それこそ、目をつぶってたつていい。

川本 映画音楽の作曲家として近年評価されているのは、『ゴジラ』の伊福部昭ですね。クラシックの作曲家は、それだけでは食べられない時代があつて、伊福部昭をはじめ武満徹、團伊玖磨や黛敏郎なども、最初のころは映画音楽を数多く手がけています。
編集部 一九五〇年代の映画を観ると、そうした方々の名前をよく見ますね。

池内 監督が木下恵介だったら、音楽は木下忠司だったり。
川本 木下恵介の弟ですね。あの方は、一九一六年生まれ、百歳を超えたいまでもお元気でいらっしゃるんですよ。

池内 佐藤勝も好きでした。生活のために映画音楽を書いた面はあるにせよ、作品としていいものは映画でこそ残るように思います。

川本 伊福部昭の『ゴジラ』は映画に合った名曲ですね。『ゴジラ』といえば、あのダ、ダ、ダン……。

池内 中学くらいだったかな、おふくろが『七人の侍』を見てきて、とてもはしゃいでいたことがありました。夫がいなかったから、明日をも知れない家庭を抱え、本当に希望のないときにあの映画を観たんでしょね。見る人を力づけるという意味では、『七人の侍』は大したものだった。テーマ音楽も、日本人なら聞いただけで生きる勇気が湧いてくるんじゃないかという気がします。『七人の侍』や『酔いどれ天使』など、黒澤明の一連の作品を手掛けていた早坂文雄という作曲家がいますね。早くに亡くなりましたが、日本映画にはずいぶん影響を与えたのではないのでしょうか。

ところで、映画音楽というのは、それぞれの映像に合わせてテーマ曲を作るんですか？ 音楽が先、ということもあるのでしょうか。

川本 ケースバイケースでしょうが、だいたいは映像を見ながら作るのだと思います。日本でマラーがこれだけ有名になったのは、ヴィスコンティの『ベニスに死す』の冒頭で交響曲五番のマダージェットが使われたことが大きいんですが、あれなんかは、ヴィスコンティの頭の中に「これを使おう」という考えが最初からあつたんでしょうね。

あとは、監督と作曲家との力関係の問題もあるかもしれません。武満徹は、最初のころは黒澤明と仕事をしていました。あるとき意見が合わなくなりました。黒澤のクラシックの教養というのは、ベートーヴェンやシューベルト、ラベルドまりで、いつも「こはベートーヴェンの〇〇のように」なんて言うものだから、いやになってしまったようです。

池内 (CDを取り出しながら) ほくは、イタリアのモリコーネの音楽が好きなんです。

川本 エンニオ・モリコーネ。マカロニ・ウェスタンですね。